

<論文>語り手の位相：源氏物語・桐壺の巻冒頭の記事表現から

著者	金安 定義
雑誌名	日本文学誌要
巻	64
ページ	22-31
発行年	2001-07-14
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020170

「語り手の位相」

——「源氏物語・桐壺の巻 冒頭の文章表現から」——

金 安 定 義

言うまでもなく、ことば（言語）は、だれか（話し手・書き手）が、だれ（聞き手・読み手）に対して、何か（素材）を表現しようとすることによって成立する。

物語文学という形態も、古代後期から中世鎌倉期の、作り物語を語り手（あるいは作者）が聞き手（あるいは読者）に語り聞かせる方法で、仮名文学の散文で書きつづった作品のことである。つまり、語り手と聞き手と素材との関係が、ことばの意味を規定したり、ことばの表現を規定したりする。物語の作者は、実際には存在しない語り手を想定して、その語り手が物語を語って聞き手に聞かせるという方法で書きすゝめる。したがって、語り手は実体ではなく、作者の分身のように、あくまで創作方法の手段として、仮構されたものにはかならない。

作り物語という素材を媒として、語り手と聞き手（読者）による共通の場がつくられる。聞き手（読者）は、上流貴族の女性たちを中心に、次第に、男性の貴族たちにも広がって行った。語り手は、女房階層の者というのが基本であつたらしい。

物語には、しばしば語り手自身の主観的な言葉がさしはさまれることがある。この語り手の主観的な言葉とは、具体的には感想・批評・推測などさまざまである。『源氏物語』の古注釈では、これらをおおむね「草子地」などと呼んでいるが、「草子地」と地の文との区別には曖昧さもあり、なお検討の余地が残されているので、「草子地」という断定的な表現は避けて、語り手の顔がのぞかれる連用修飾語（句）を中心に、「桐壺」の巻、冒頭の文章をめぐって、〈読み〉の可能性を追求してみよう。

いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

（『日本古典全集』『源氏物語』（1）九三頁）

傍線1「いづれの御時にか」、傍線2「女御更衣あまたさぶらひたまひける中に」は傍線4「ありけり」にかかる連用修飾

句で、傍線1は「時」を、傍線2は「場所（条件）」をあらわす。

「今は昔、竹取の翁といふものありけり」ということばではじまる『竹取物語』などの昔物語、つまり『源氏物語』以前の物語にあつては、「むかし」あるいは「今は昔」という語りおこしにはじまり、物語の主人公が主人公の親を紹介するのが常套的になっていた。傍線3「いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれてときめきたまふ」方で主人公、光源氏の母親を紹介する。

さて、「むかし」「今は昔」と「いづれの御時にか」という冒頭の表現との違いは何であろうか。

一般に、「むかし」という規定だけでは、過去は漠然として虚実未分の状態や、単純な過去として表現されているのに対して、「今は昔」という表現には、「今となつては昔のことだが」とか、「今ではすでに昔の物語となつた」という意味が込められ、過去は現在に対立するものの意に解されている。三谷栄一氏はこれをふまえて「今ここに語る説話は既に信用の置けないような、ひよっとすると事実ではないかもしれない、という意味を含めてか」（『物語文学史論』）とも理解しようと説明する。

では、古物語の形式を継承する『源氏物語』において、「いづれの御時にか」という疑問、ないしは不定の表現は何を意図し、その背景には何があつたのだろうか。先に、語り手や聞き手と素材（作り物語）との関係が表現を規定すると述べたが、そこに、何らかの変化があらわれたと考えられないだろうか。

たとえば、古物語といわれる虚構物語に対して、女性が自分

の目で、自分の心で生活をみつめ追及しようとする、いわゆる「女流日記文学」が生み出されたことは注目されよう。藤原道綱母の『蜻蛉日記』はその最初の作品である。そこには、娘のころ読みふけた古物語の中にある上流貴族の恵まれた夫婦生活は、単に虚偽にすぎなかったということをしり、それだけにまた夫から目をそらして、ひたすら一粒種の道綱の養育に没頭する悲しい母心もしるされている。つまり、昔物語への不信は、漠然と過去をあらわす虚実未分の状態や、ある種の超現実的なロマンティズムに対して、現在に立脚したりアリズムの動きとなつてあらわれ、これまでの「むかし」とか「今は昔」とかいう伝承の型にのせる語り方ではおさまらない、創作意識が芽生えてきているとみられよう。

伝承や物語類の冒頭表現の諸類型とその史的な展開を研究してこられた、塚原鉄雄氏は「時代を不定として規定される『いづれの御時にか』とか『いづれの頃にか』とかいう冒頭」表現は、「現在から分離された『むかし』の物語ではなく、現在に存在する事実の記録というわけではないけれども、現在にも存在しうる可能性を具備する過去である」と説き、さらに「時間の距離が、量的な差異を表示するだけで、質的な隔絶を意味しない——そうした過去である」（『冒頭表現と史的な展開』）『王朝の文学と方法』と述べていることは注目される。また、清水好子氏は「帝の御代について、歴史的時間について疑問の形で出すことによって、じつは伊勢集や長能集、あるいはかげろふ日記のような実録がそれをしたときと同様な、背後に実在の歴史を踏まえて語り出しているのだ、この話は事実なのだ、と

いう印象を讀者に与えはしなかったか。」（第一章「いづれの御時にか」『源氏物語論』）と述べていることも重要な指摘である。つまり、不特定の、仮定の過去と規定する表現によって、かえって、虚構の世界に現実性を賦与しようとしているのである。「むかし」あるいは「今は昔」ではじまる古物語は、概して、語り手によって与えられたとおりの在り方で、作中人物に接し、作中人物の語るとおりに考えさせられる受動的な聞き手（読者）の態度とは異なり、不定であるが故に聞き手（読者）に、事実らしきもの、過去にもあったかもしれないが、現在にもあるかもしれない何かを探し求めていく余地を残しているのである。「いづれの御時にか」という語句は、傍線4「ありけり」にかかるが「ありけり」の「けり」の助動詞のはたらきは、「よく知られていない過去に存在したものが、いまや自分の範囲の中にはつきりあることを表すものになります。（中略）つまり、見て気がついた、今までの事になっていた事実を、自分が今はつきり意識にのぼせたということです。」（大野晋、『古典文法質問箱』）といわれている。語り手が聞き手（読者）に問題を投げかけて、聞き手に考えさせようとしているのではないだろうか。

次に、「女御更衣あまたさぶらひたまひける中に」という部分の吟味に入ろう。

すでに、『蜻蛉日記』のところで述べたように、古代前期から後期にかけて、時代が下降するとともに、文学の世界に現実性を要求する動きがあったことを述べたが、この文章においても、後宮の様子を古代的な姿そのまゝ、語り手は語ろうとしてい

るわけではないだろう。

「女御」とは、中宮に次ぐ天皇の夫人で、平安中期には摂政・関白・大臣・上達部などの娘がなるのが普通であった。「更衣」とは女御に次ぐ女官で、天皇の御衣更を司る者の称であるが、女御同様、天皇の夫人となる者もあった。大納言以下殿上人の家などの娘がなるのが普通であった。これらの女性たちが「あまたさぶらひたまひ」、数多く帝のお側に仕え、寵愛を得るところからみると、語り手よりも、身分は上の方々であろう。ところで、後宮の成立を追及していくと、いろいろの古代的な意義を避けるわけにはいかない。

西村亨氏は、いろいろのみは「古代生活の美德であり、理想であったからである。それは多くの女性に性的な関心をいなくとでなく、多くの女性たちのもつ宗教力をわがものとし、それによって君主としての支配を完全ならしめることであつた。」と説き、そのためには、「天子やそれに準ずるような大貴族のいろいろのみは、対象とする女性たちを選別し、それぞれに対して愛着を持ち、また女性たち相互の関係を円滑ならしめるという重い責任を有している。その責任を果すことによって、いろいろのみははじめて美德となる」（『折口名彙と折口学』）と述べ、折口信夫の研究を跡づけながら、古代人の恋愛生活にみる美德のうちに、君主としての支配の論理を浮びあがらせる。

一般的に、政治を世襲の生業としている男性の貴族にとって数多くの美しい妻を迎え、政治力や経済力のある家々と結ばれることは家の安泰という意味からも、家長はもとより同族の者

からも歓迎されたことであろう。そして、また、妻たちに愛を配分するにも、その女性の背後にある家々の政治力や経済力を考慮に入れて、その「力」の度合いに応じて、行うことが肝要であったにちがいない。つまり、いろいろのみという、理想的な王朝の人々の「古代的なみさを」ともいうべきことは、君主としての支配力の強化という背景をもっていた。その表と裏の論理をバランスよく行うことが美德とされていたのである。したがって、多くの妻たちの中で、一人の女性にのみ愛が集中するとなれば、その他の女性たちの背後にある家々との関係は危機的になるから、それは戒しめられ、許されない掟にさえなっていたに違いない。

表面的には穏やかに古代的なモラルを装っていた後宮ではあったが、「いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふ」（たいした高貴な身分ではない方の、めだつて時めいていらつしやる）人が現われた。いろいろのみというのはその恋愛生活と女性の背後にある家の「力」との結びつきをバランスよく行うことが、最高のモラルとされていたことはすでに述べた。ところが、帝は、さして高い家柄の出でない女性をこよなく愛された。愛することが優先したのである。後宮の秩序が崩れる。俄然、後宮は緊張する。物語の発端がこうした緊張ではじまることは、古物語にはなかったことである。聞き手（読者）はこの事件があつたかこの事件か記憶をたどつて思いおこそうとする。意識の中でイメージ化する。そうして次第に現実味を帯びてくる。

はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、ましてやすからず。

〔全集〕(1)九三頁

才色兼備、その上、高貴な家の出で、両親が政治力も経済力もある人の娘は、入内した時から、自分こそ他にもまして帝の寵愛をうけるものと思つていらつしやうた。いや、思い上つていらつしやうた。語り手は感情を交えて批判的に見ている。そうして、そういう思いで、日夜、宮仕えをしていた「御方々」は、この「めざましきもの」に「おとしめそねみたまふ」、實際行動に出たのである。それはすべて「いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふ」人の出現によつてであつた。今まで覆われ隠れていたものが、急に露出したのである。背後に「家」の力のある女性は感情を露わにすることもできるが、「家」の力もさほどでもないか、劣つた人はたゞ／＼思い悩むばかりである。ここで、主人公がひどく劣つてはいないものの、更衣の身分であることが間接的に示される。（以下、この女性を通称に従つて、桐壺の更衣と呼ぶ）

平安時代、それも藤原氏全盛の時代、後宮はいかにも花やかで、女御・後の貴い境涯がその時代の女性にとつてあこがれの境地であつたことはいふまでもない。のぞみとも言えないのぞみ、最上の世界、夢の世界であつた。しかし、『蜻蛉日記』にみられるように、藤原北家のように、貴族の主流に位置を占めないものは、貴族といえども、厳しい現実がまつていた。摂関政治が進行する中では、藤原北家出身で、政治力、経済力のな

き貴族はますます、娘を入内させ、天皇家との関係を深め、御子が生まれようならば、外戚として、摂政関白の地位につき、力を揮おうとする。「家」の力がそれほどあるわけでない貴族の場合でも、後宮内の序列を認めつつも、帝の寵愛を娘がうけるようになれば、「家」の繁栄につながることであるし、帝との間に御子が生まれたということになれば、「家」のみならず、一族の繁栄すら約束されるかもしれないから、熱心になる。すべては、親たちの政略ですえられた位置であった。

朝夕の給仕につけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけん、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思ほして、人のそしりをもえ憚らせたまはず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。

『全集』(1)九三頁

帝はひとり桐壺の更衣を寵愛し支えるが、かえってそれが他の女御や更衣の嫉妬をかい、そのため病気がちになり、里下りすることが多くなる。帝は「いよいよあかずあはれなるもの」に思ほして、「強く更衣を寵愛するが、いよいよ嫉まれ、更衣はいよいよ弱くなる。その悪循環を描く。

「人（他の女御や更衣）の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけん」は、述語「いとあつしくなりゆき」にかゝる、連用修飾句で挿み込み文であり、語り手の推量である。また、「もの心細げに里がちなる」も、「里がちにて物心細げなり」とほぼ同じ意味で、連用修飾語があとにくる述語の結果を、つま

り、「里へとかく帰って、何となく心細そうにしている」と、語り手は推測を交えながら更衣を描いている。語り手の視線を感じながら読むということは語り手が更衣をどんな人物として形象しようとしているかを知る上でたいせつである。たとえば、この桐壺の巻の前半は、『長恨歌』を「したににははせてかかれたる」（萩原広道『源氏物語評釈』）といわれているが、『長恨歌』の「眸ヲ回ラシテ一笑スレバ百媚生ズ、六宮ノ粉黛顔色無シ」という、後宮を威圧する楊貴妃のイメージとこの桐壺の更衣を比較すれば、更衣のイメージは愛されたが故に嫉まれ、他人の視線を気にしながら生きる弱い女性である。語り手は聞き手にとっても既知の楊貴妃のイメージを用意させながら、帝と桐壺の更衣の話を続けて行く。

「いよいよあかずあはれなるものに思ほして」

幕末の源氏物語の研究者に、萩原広道という人がいた。彼はこの部分を批評して次のように述べている。

「人の妬むによりて里にすみがちなれば逢ひ給ふこと遠くして、いよいよ飽かずあはれにおぼえ給ひつつ、竟には人のそしりをもえ憚らせ給はぬ也。げに人の情はさるものになんありける。此の脉、次々にます／＼甚しくなりもてゆく様よく／＼心をつけて味はふべし。」

『源氏物語評釈』

今まで逢おうと思えば逢うことのできたものが、逢うこともできずにおれば、思いも募り、再び逢うことのできた時は、人の目も遠慮することなく愛しようとすることは、人の心として当然のことだ。他の非難するにあたぬ旨を萩原広道は言外にほ

のめかして述べている。そして、のちに、桐壺の帝が亡き更衣の面影を求めて、藤壺を迎えたこと。また、光源氏が亡き母更衣の面影を求めて藤壺に迫り、その道もふさがれると、藤壺のイメージを求め、紫の上と結ばれていく、など。抑えられれば抑えられるほど、強い心の動きとなって噴出する愛のあり方を指摘しているのは注目される。

帝は、「人のそしりをもえ憚らせたまはず」と自らの権威のあるところを示すけれども、桐壺の更衣にはマイナスでしかない。

「世の例にもなりぬべき御もてなしなり。」帝が周囲の目に遠慮することなく、ところかまわず愛する有様を見て、「家」の意志で入内した人たちも、女性として、うとましく思うのは当然である。語り手は、「世間の話の種にきつとなるのであるような」、「ぬべし」「ぬ」は、自然的、客観的な「たしかめ」の意で、それが自然のなりゆき、客観的ななりゆきとして見えている。

上達部上人なども、あいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おほえなり。〔全集〕(1)九三頁)

ところが、その噂は宮廷の男性の社会にも広がる。

帝の更衣に対する偏愛ぶりを見た高官たちが目のやり場に困っているところである。「あいなく目を側めつつ」——「目をそばめなくてもよいのに、目をそばめそばめして」の意でもあるが、また「目をそばめても何にもならないのに、目をそばめそばめして」とも理解することもできる。つまり、「目をそばめつつある結果がいなし」と語り手が批評したのである。本来、

「目を側める」とは、余り良いと思っていないので、そっぽを向く、という意で、「あいなし」は適切を欠くという意で、高官たちの態度を、帝の臣下として時宜になかった、しつくりした動作でないのを、語り手が評したのである。

賀茂真淵は上達部上人などが「あいなく」の意に、権力者におもねる廷臣たちの姿を読みとっていた。

「此更衣は愛敬人こそ聞ゆれ。帝の御寵も世のかひ有ほどの事ならぬを、豪家より悪しさまにいふをうけて、諸人も、さ思ふをしらせし書きさま、末の文にてしるべし。」〔源氏物語新釈〕

後宮が女性の背後にある勢力によって序列化され、秩序化されていたことをうけて、それを認めようとする当時の風潮に対して、上達部上人の非難がふさわしくないことを説いていた。それから三〇数年後、本居信長は、「あいなく」について次のように述べている。

「此詞、数もなく多く有り、それを悉く見渡し合せて考ふるに、何といふわきまへもなしに、うちつけに物する事なり。ここもその意にて、おのが身にかからぬ人までも、何といふことなしに目をそばむる也。云々。」〔玉の小櫛〕と説き、「自分の身にとり直接かわりのないことであるのに、「利害のない第三者であるのに」の意に用いられていることに気づいていた。

後宮の女御更衣にくらべれば、上達部や上人などは第三者であつて、かならずしも腹を立てるに及ばないことである。むしろ、熱愛する二人を祝福すればよいことかもしれない。ところが、あまりの偏愛にあちらこちらから帝に対する非難がささや

かれ出すと、廷臣として祝福するどころではなくなってくる。「まばゆし」という語には、二重の意がある。「まぶしいほど立派である」と「あまりにこれ見よがしなので」思わず顔をそむけなくなる」（『岩波古語辞典』）。廷臣も生身の人間である、まともに見てはおれなくなる。天子は聖の帝であつて、万人の模範でなくてはならない。ところが、その帝を仰ぎみようと思つても、正視することすらできず、目をそらさざるをえない。理想的な君臣関係の崩壊である。臣下としては帝の挙措動作を仰ぎみなければならない。しかし、血の通つた人間としてはまともに見てはおれない。語り手はそうした矛盾をとらえて批評している。

唐土にも、かかる事の起りにこそ、世も乱れあしかりけれど、やうやう、天の下にも、あぢきなう人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにて交らひたまふ。

〔全集〕(1)九三頁

「唐土にも、かかる事の起りにこそ、世も乱れあしかりけれど、帝の私生活よりも国政に及ぼす影響を言われるようになる。帝の周囲でこの事態を理性的に見ていた人、帝の側に一番最初に入内した人、弘徽殿女御が帝をこう諫められたのであろう。弘徽殿女御は帝と桐壺の更衣の間に玉の男皇子が生まれるまでは嫉妬にかられて感情的なことも言われなかったであらう。しかし、その話を漏れ聞いた人たちは、弘徽殿女御の諫言として

受けとるよりも、政治向きの話題として尾ひれをつけ噂を広げて行つた。

そして遂に「天の下にも、あぢきなう人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつくなりゆく」。²傍線1「あぢきなう」は、傍線2「なり」にかかる連用修飾語で、語り手の思いを述べた語と理解できる。松雄聰氏はその意味を「天の下にも人のもて悩みぐさになり、そのなり方がはたから見ても、あぢかないというのであろう。」（『全釈源氏物語』巻一）と説く。他人ごととしてながめていられれば、思うようにならないことも、冷笑して見ていられるが、本来、人生は矛盾や失敗に満ち満ちていて、当事者にとつてまことに思うようにならない、厄介な、始末に悪い、処置に窮することばかりである。それを自分の身にかかわりのあるものとして受けとめれば、同じ慨嘆でも、茶の間から冷笑ばかりはしておれず、何とかうまく処置する方法が見つからないことを悲観的に嘆かなくてはならない。語り手のそうした気持を言い表わしたのが「あぢきなう」（「全く困ったこととして」「実に始末が悪いこととして」）である。もと／＼後宮内部の問題であるのに、そこにとどめずに、他の問題にすりかえられて行くことを語り手は憂慮し、いらいらしているのである。

「楊貴妃の例も引き出でつくなりゆく」、「楊貴妃の例」が、すでに宮廷内の高官では噂されていて、今にも天下に「引き出でつくなりゆく」、一歩手前であつた。十分、その気配はうかがえたのであろう。ところで、傍線3「つ」のはたらきは、人為的―作爲的な確認（強意）の意と言われる。先述の「ぬ」

とははたらきが異なる。つまり、そういう気配を何者かが意識的に醸成し、今にも世の中に広まる勢いだということである。

桐壺の更衣はすでに述べたように、楊貴妃のように敵をおとし入れてわが身の寵を維持しようという強い性格の人ではない。にもかかわらず、高官たちが「楊貴妃」に見立てて非難していることは後宮に女御として娘を送り出している権門勢家にとつて、史実をもつて、自らの権力拡充することを合理化するため用いる策略的なことばづかいのようにみえてくる。ここにも語り手の批評性があらわれている。

「いとはしたなき事多かれど」、帝の御渡は「ひまなき」とい、更衣の参上は「あまりうちしきるをりをりは」というのは、帝の積極的な寵愛ぶりを示すものである。更衣は受動的であり、むしろ迷惑がつているように見える。ところが、「あまりうちしきるをり」は、他の女御更衣はおさえきれず、意地悪をする。「はしたなし」とはこういう時のことを言うのであろう。けれども「御心ばへのたぐひなきを頼みにて交らひたまふ」、帝が庇護してくださることだけを頼りにして、宮中での他の女御更衣との人づきあいをしていった。つまり、帝の愛情だけを頼りに、周囲の嫉妬や非難、迫害を受けながら、それに耐えつつ、宮仕えをしていたのである。

父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりてよのおぼえはなやかなる御方々にもいたら劣らず、何ごとの儀式をももてなしたまひけれど、取りたてて、はかばかしき後見しなけ

れば、事ある時は、なほ扱ひどころなく心細げなり。

〔全集〕(1)九四頁

さて「後見」がなくては入内はできない。宮仕えはできない。入内は個人の問題ではなく、一族一門の代表として、一門の希望を負う。彼女の幸福は一門の繁栄を約束するから一族あげて応援する。そこで、更衣の家族の紹介に入る。

傍線部「親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にもいたら劣らず」は、連用修飾のかたちで、後に続き、挿み込み文である。挿み込み文のはたらきは、客観的に叙述している本筋の文の流れの途中にあつて側面から筆者、あるいは物語の語り手の説明や感想などを補足的に叙述する。挿み込み文の部分のをぞいて引用の文章を考えてみると、桐壺の更衣は大納言の娘であつたが、その父はすでに他界していて、旧家名門出で教養のある母ひとりの後立てとなつて、娘の宮中での生活を支えている。しかし、これという、力のある後立てがあるわけではないから、宮中で行われる格別の儀式など、何かと改まったことのある時には、やはり頼りにするあてがないので、心細いように見える、ということになる。

ところが、傍線部の挿み込み文の語り手の説明を加え、読むと、大納言の未亡人は娘の後見人として懸命に努力するものの、その力には限度があることをただ語り述べるだけでなく、政治的にも経済的にも力のある権門勢家に対して、たとえそれらに追いつくことができないにしても、追いついていこうとする、常に爪先き立つように張りつめた更衣の母のイメージが作り出されてくる。

入内は家と一門の問題である。一族一門の繁栄につながる。一族一門は総力をあげて、応援する。それが「後見」である。宮廷の儀式に応じ、季節や身分、年齢にふさわしい衣裳を、女房たちの分まで、然るべく整えなければならない。また、公式の行事、作法の定まった行事、それにのぞむために必要な故実をわきまえておかねばならない。然るべき家柄で相当の財力がなければ不可能である。「親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々」でなければ無理である。しかるに、更衣には、父大納言はすでになく、「取りたてて、はかばかしき後見」もない有様、母北の方だけが頼りである。その母が、「親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にもいたう劣らず」更衣を後から支えたのである。「いたう劣らず」である。劣っていることは劣っているのである。ただひどく劣っていないのである。たいへんな努力である。その母をしてこのような行動を可能にしたのは何か。語り手は言う。「母北の方なむ、いにしへの人のよしある」なり。つまり、昔かたぎの、教養の身についた人だったというのである。そこには、打算や成り上り根性を否定する、精神の型をみる。たんなる尚古主義とも違う。たとえば、更衣が帝に別れて退出する場面で「あるまじき恥もこそと、心づかひ」（『全集』(1)九七頁）に見る北の方の教養（宮廷の掟に従った的確な判断力）と娘に対する愛情。更衣の葬送の場面で、近親者の送りは戒められているのに、「むなしき御骸を見る見る、なほおはするものと思ふが、いとかなければ、灰になりたまはむを見たてまつりて、今は亡き人と、ひたぶるに思ひなりなん」と、をかしうのたまひつ

れど、車よりも落ちぬべうまろびたまへば、……」（『全集』(1)一〇〇頁）に見る情の人としての母北の方の姿が浮んでくる。さらに、勅使鞠負命婦と故人を偲ぶ場面で、帝に対する奉答では理論的にととのった言い方をしていたが、命婦をひきとめ私的な対話になると、胸にいっぱいいたまっていたものを吐き出すように、死んだ娘のことを話しはじめた。更衣の入内は、亡き大納言の遺言によること。更衣の氏は横死の観があること。この二つは、亡き大納言の遺言を思い、帝の寵愛を考えた結果なされたことだが、どちらも無理があった。この二人の無理が娘を自分から奪ったのである。（このことは、「いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふ」情況と対応する）この判断は誤りであろうか、と命婦に迫る。これをわかつてくれる人は、このことを話してもよいのは命婦一人である。帝に対する恨み言をもっと／＼聞いてほしいのである。聞いてもらえるのは命婦だけである。愚痴である。愚痴ではあるが、母北の方の言い分は本質をついている。そういう本質を見抜くことのできる人であったからこそ、「御方々」＝権門勢家の背後にあるのが、力を背景にした世俗の論理であることに気づいた。それでたたかった。しよせん、勝てぬことながらも、「さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々を」と「いにしへの人のよしある」ものとの対立の図式が浮かびあがった。母北の方は理想的な王朝の人々の「古代的なみさを」を一途に追及しようとした人だろう。その人から見ると世の中は権門勢家の、天皇家をまき込んだの権力の拡充にあけくれる有様に見えてきたというのではないか。そしてそれは、後宮も宮廷も世の中全体

がそういう風潮を是認しようとしているようにみえたのではないか。つまり、母北の方の存在は物語の外にいる筈であった語り手が物語の中に登場し、事件の展開を説明し、批評し、物語に血を通して、と思える。

その意味で、語り手（作者）が、伝えられた物語の内容をどう理解し、どう感じ考えていたか。また、聞き手は物語の内容をどう理解し、どう感じ考えていたか、物語成立の場面を考えながら読むことがたいせつであろう。

（かねやす さだよし・一九六四年修士課程卒）